
両大戦間期の英領インドにおける日本製マジョリカタイルの受容について

近代日本のタイル工業は、明治 40 年代に乾式成形法による硬質陶器タイルの開発に成功して以来、大正期にかけて急速に発展し、アジア各地へ積極的に輸出されるようになった。特に、マジョリカタイルと呼ばれるイギリスのヴィクトリアン・タイルを規範に製造された多彩レリーフタイルは、各地の新興富裕層から人気を博した。

本発表は、大正から昭和初期にかけて輸出された日本製マジョリカタイルのアジア地域における受容実態を明らかにする試みとして、インド市場に焦点を当てるものである。近年、堀込憲二氏や深井明比古氏によって当該時期の台湾やマレー半島における日本製マジョリカタイルの使用例が報告されているが、インドについては全く関心が寄せられてこなかった。しかし、当時の日本窯業の動向を伝える『大日本窯業協會誌』や『窯業大観』（1933）などの資料からは、インドが中国と並ぶ有望な市場と見なされていたことが読み取られ、戦前期日本の窯業を考察するうえでインドが重要な考察対象であることを示している。

そうした状況にあって、インド北部ラージャスターン州シェーカーワーティー地方において、1830 年代から 1930 年代にかけて建てられたハヴェーリーと呼ばれる商家建築のうち、1920 年代以降に造営された複数例から、日本製マジョリカタイルとみられる壁面装飾が確認された。現地に保管されていた未使用品の意匠と裏型のメーカー商標を照合すると、同一意匠のタイルが淡陶（株）や佐治タイル（資）など複数のメーカーによって製造されていたことが判明した。さらにこれらの意匠の多くは、元来はジョンソン社などイギリスのメーカーが考案したものであった。つまり日本製マジョリカタイルは、第一次世界大戦後に製造量が低下したイギリス製タイルの代替品として、インド市場へ進出を図ったのである。

その後は日本製タイルの品質自体がインド国内で認められるようになったとみられ、『不二見タイル 110 年史』（1989）によると、昭和初期にはインドから大判の印刷画を制作見本とする高額の特注を受けていたという。これは、現在も複数のハヴェーリーに確認される 12 枚 1 組のタイル画を指すとみられ、インド近代絵画の父と謳われるラージャー・ラヴィ・ヴァルマー（1848－1906）の作品を複製している。ヒンドゥー教の神話世界を西洋絵画風に描いたラヴィ・ヴァルマー作品はインド国内で絶大な人気を博し、印刷複製画、さらには大量生産品のラベルデザインへと二次的に複製され、全インド的なアイデンティティ共有を可能にするイメージとして機能した。インドにおいて、日本製マジョリカタイルはイギリス製品不買運動と結びつくとともに、ラヴィ・ヴァルマー作品を複製することによってヒンドゥー・ナショナリズムというイデオロギーの投影物にもなったのである。こうした考察結果から、本発表においては日本製マジョリカタイルが日印双方にとって歴史的意義をもつことを提示したい。